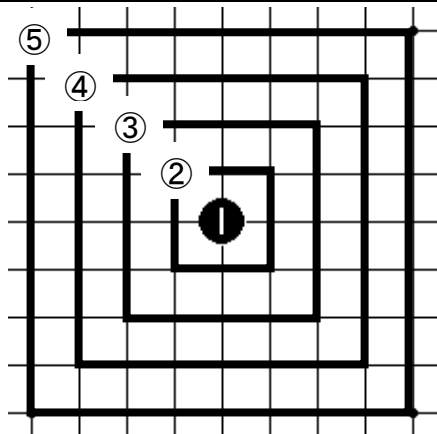


連珠っておもしろい

九段 河村典彦

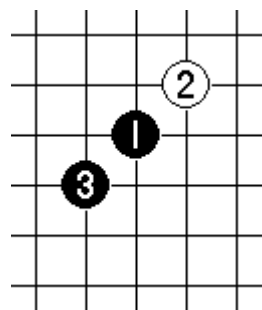
●第30回● 新しい開局規定

以前、ここでもご紹介したが、RIFではまたしても新しい開局規定の導入に揺れている。日本は当然のように題数指定打ちを推奨しているのだが、外国、特にロシア、エストニア勢はタラニコフルールというものを推している。前回はいったんヨンソルルールで決まったが、日本が拒否権を發動して白紙に戻っている。今またRIFの会議に向けて活発な提案がなされている。今回は、欧米諸国が一押ししている新しい開局規定をご紹介しよう。

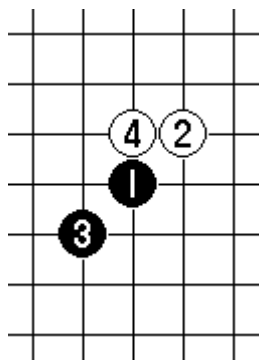


囲が1路広がっていく。なので最初の3手は珠型の囲内になる。

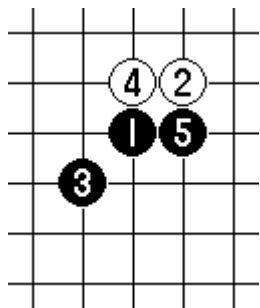
タラニコフルールとは、直前に打たれた相手がその次の手をそのまま相手に打たせるか、自分が打つかを決めることができるというものである。そして5手目を打たれた相手が最終的に黒白を決め、あとは通常のルールで行うというやり方である。1手ごとに交代権が発生すると思ってもらえばよい。話がややこしいの



で仮先黒3までは最初に決めるでしょう。例えば相手が斜目を指定したとする。自分はそのまま白4を打つか相手に白4を打たせるか選択できる。わからないので相手に白4を打たせるとしよう。

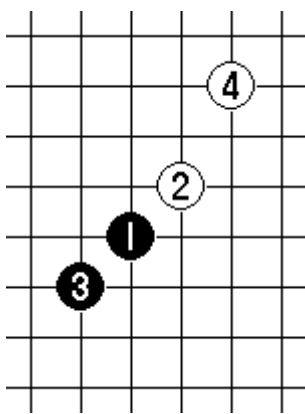


白4と打たれたので、また選択権が自分に来た。ここまで来ると黒5を見て最終的に黒白を決めた方がいいように思うので、やはり続けて相手に黒5を打って

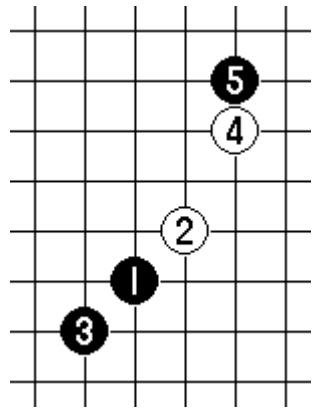


もらうことにしよう。

黒5を見て、黒白を決めればこれで終わりである。なんだ、今とそんなに変わらないじゃないか、と思う人もいるだろうが、実はこれまで見たこともない形が現れる可能性もある。



タラニコフルールでは、こんな4も可能である。要は黒5までで均衡の形が取れればよい訳だから、黒5をさらに弱い所に打てば良

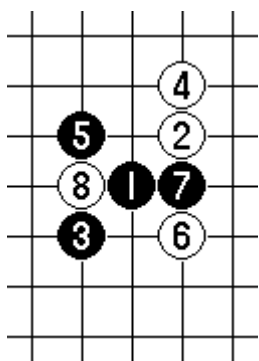


いのである。例えば黒5としよう。この黒5までで黒白どちらを取ればいいかわかるだろうか？白4と黒5が変な形ばかりになる、というのがタラニコフールの弱点と指摘された。そこで、これに対応したのがタラグチルールである。これは、「白4の時点で黒5を五題打ちの条件で黒番を確定できる」というものである。先の例なら、白4を打たれた時点でこのオプションを宣言し、黒5を5つ示して黒を確定させればいいということである。この付帯事項により、いわゆる変な白4は出現しなくなる。

タラニコフと題数指定のヤマグチルールを足したものとという意味でタラグチルールと呼ばれる。

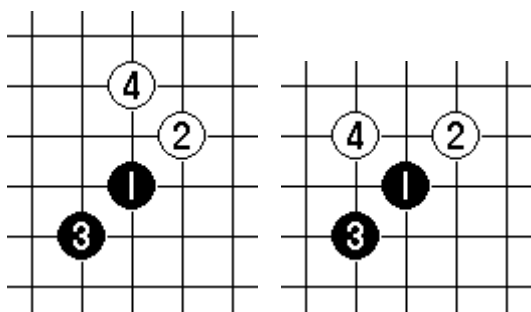
では、タラグチルールと題数指定打ちを比較してみよう。浦月、花月の必勝珠型は、実は五題打ちの題数指定と同じことになる。もし、相手に浦月、花月を打たれたら、どんな白4でも黒番を確定させてしまえばいいからである。

同様に、黒の打ちやすい珠型でもあまり題数指定と変わらない局面が多いと推測される。では、互角の珠型はどうだろうか？



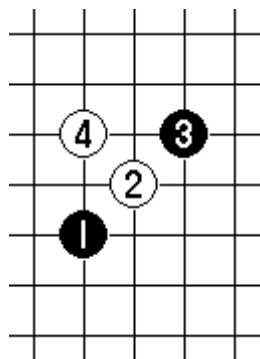
もしこの白8までの形が斜月3題は打てない。タ

ラグチも同様にこの白4は打てない（定石、慣手なら黒、それ以外なら黒を取る）が、他の白4の可能性が出てくる。

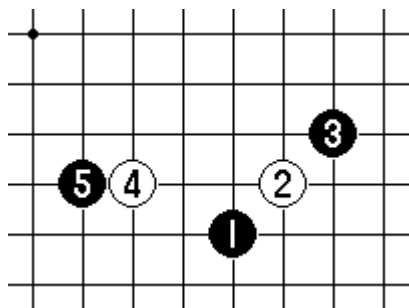


これらの白4はタラグチルールなら可能であろう。しかし、一番違いが出るのは黒の難珠型と呼ばれる珠型である。例えば長星を考えてみよう。

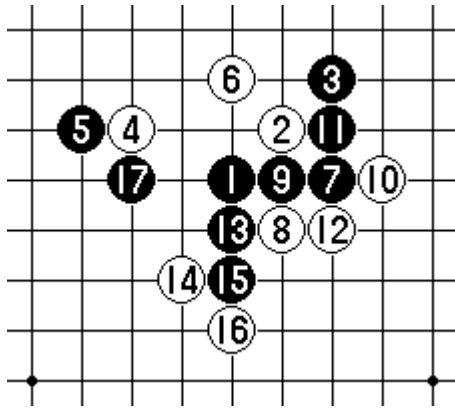
長星は題数指定打ちならこの白4の強防があるため、せいぜい1題であろう。



一題なら白もこの4しか打たないので、長星定石しか想定されない。しかし、タラグチまたはタラニコフでは、白4をわざと弱防に打ち、一旦互角に戻すという技が発生する。これはヨソソルルールなどの四珠交替系のルールでも同様である。例えば、



こんな白4、黒5も考えられる。これなら白有利と思つて白を取り普通に打つていくと、思わぬところで黒5の石が効いてくるので注意が必要である。



このように、黒5までの形がどちらが有利かを正確に判断するのは非常に難しいが、今までよりも格段に局面が広がるのは間違いない。まとめてみると、

◎簡易珠型

題数指定とほぼ同じ

◎互角珠型

題数指定打ち十新しい白

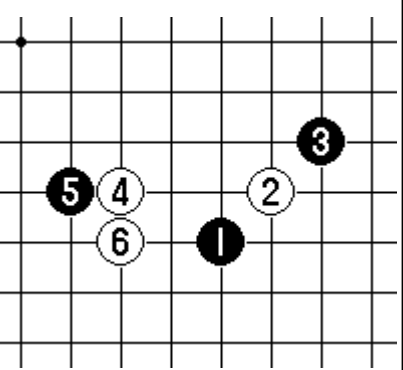
4の作戦が可能 ◎難珠型

題数指定とはまったく違う局面になる
と予想される。

では、実際にこのルールでやってみると仮定した時に、どんな作戦を考えるだろう。

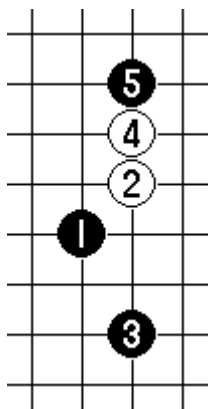
どんなルールであれ、最終的に黒白を選ぶ方が若干有利なはずだから、仮後の時は相手に黒5までをすべて打たせ、その局面を判断することになるだろう。仮先の時は、先の長星のような難珠型で自分独自の白4、黒5を研究しておいてそれをかけるか、その他の珠型でも自分の得意型に持つて行く(例えば私なら名月一(間飛び)ようになるだろう)。

また、従来の考え方とは違うセオリーが当然発生するとも予想される。これまでは黒1、3、5の石が結びついていたのでそれを妨げる発想しかなかったが、



もし1、3、5が離れるようになると、白の防ぎ方も変わり、例えば先の例では白6がひよつとすると強防になるかも知れない。つまり、黒3と5が離れている場合には、黒5の石を相手にすることが可能になる訳である。

ただ、やはり強い人が勝つのは間違いないだろう。かつて、吉澤さんがこんな



黒5も研究されていたが、新しいルールになるとこういった研究が実を結ぶことになるのだろう。

このタラグチルルールが日本でも受け入れられるかどうかはわからない。既に私は初心者の方が失われていくからで、連珠を知らない人や、級位者や低段者の方を見たらどう移るのだろうか？

連珠は高段者だけのものではないが、トッププレイヤーに魅力のない競技も当然発展がない。初心者への普及、五目並べからの移行、マスコミへの受け入れ性などを総合的に考えて(しかも世界中のことを考えて)ルールは作らなければならぬ。言えるのは、最適なルールというのはなく、常に時代に応じてその時々で最善の方法を模索しなければならぬということであろう。皆さんはどうお感じになったであろうか？